

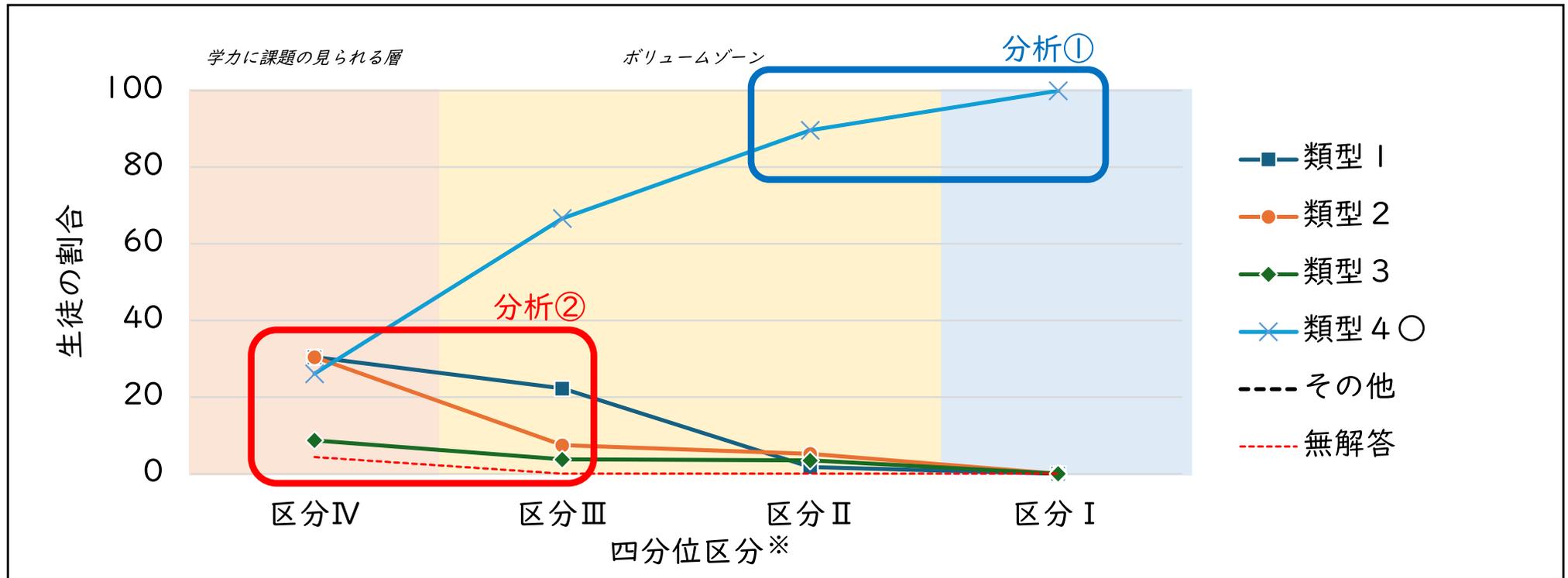
令和7年度 中学生チャレンジテスト
G-P分析図を活用した分析

令和8年3月

大阪市教育委員会事務局

G-P分析図を活用した分析

「G-P分析図」とは、調査を実施した生徒の学力層を分類して（横軸）、学力層ごとに解答パターンがどれくらいの割合でいるか（縦軸）をグラフに表したものです。



※四分位区分は、中学生チャレンジテストにおける大阪府の得点分布状況から、得点の高い順に概ね25%区切りで、区分Ⅰ、区分Ⅱ、区分Ⅲ、区分Ⅳの4つに分けたものをさしています。大阪市版チャレンジテストplusにおいては、大阪市の正答率分布状況から、正答率の高い順に概ね25%区切りで、区分Ⅰ、区分Ⅱ、区分Ⅲ、区分Ⅳの4つに分けたものをさしています。

分析①

正答となるタイプ4のグラフを見ると、区分Ⅰに属する生徒の約10割、区分Ⅱに属する生徒の約9割が正答していることがわかります。

分析②

区分Ⅳに属する生徒は正答率が3割に届かず、同じくらいの割合でタイプ1またはタイプ2と解答し、誤答になっていることがわかります。

誤答となるタイプ1、2の内容を分析することで、区分Ⅳの生徒に対する課題を把握し、区分Ⅳの生徒に対して指導すべき事柄がわかります。

各学年・教科における得点*による区分の目安（令和7年度）

※大阪市版チャレンジテストplusの場合は正答率

令和7年度 中学校チャレンジテスト

中学1年生

	国語	数学	英語
区分Ⅰ	80点以上	75点以上	80点以上
区分Ⅱ	65点～79点	55点～74点	65点～79点
区分Ⅲ	45点～64点	35点～54点	45点～64点
区分Ⅳ	45点未満	35点未満	45点未満

令和7年度 大阪市版チャレンジテストplus

中学1年生 (%)

	社会	理科
区分Ⅰ	73.7以上	78.4以上
区分Ⅱ	58.3～73.6	63～78.3
区分Ⅲ	42.9～58.2	47.6～62.9
区分Ⅳ	42.9未満	47.6未満

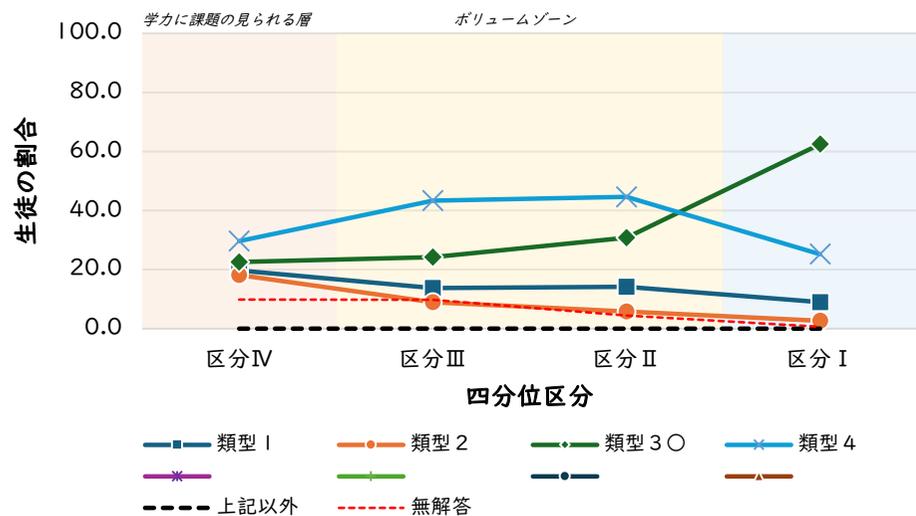
中学2年生

	国語	数学	英語	社会A	社会B	理科
区分Ⅰ	80点以上	75点以上	70点以上	55点以上	55点以上	60点以上
区分Ⅱ	65点～79点	55点～74点	45点～69点	40点～54点	40点～54点	45点～59点
区分Ⅲ	50点～64点	30点～54点	30点～44点	25点～39点	25点～39点	30点～44点
区分Ⅳ	50点未満	30点未満	30点未満	25点未満	25点未満	30点未満

中学生チャレンジテスト問題分析（1年生・国語）

問題番号	五 4	解答形式	選択式	本市正答率	35.8%
問題の概要	主語として適しているものを選択する				
出題の趣旨	場面の展開や登場人物の描写に注意して読み、内容の理解に役立てることができる				

G-P分析図（本市1年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、古典中の動作の主語として適しているものを選択する問題である。区分Ⅰでは62.5%が正答しているが、区分Ⅱでは正答は30.9%にとどまっております、区分Ⅱの生徒でも動作の主語を読み取れていないことが分かる。

一方で、区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳで最も多い類型は、動作の直前の語を主語とする類型4を選択した誤答であり、区分Ⅰにおいても25.2%の生徒が選択していることから、文章を読んで主語と述語との関係を捉えることに課題があると考えられる。

【指導の改善に向けて】

古典に限らず普段の授業から、文章を読むときには、主語と述語との関係を意識させる学習場面を設定するなど、動作の主体を明確にさせ、場面の展開や登場人物の描写など文章の流れを捉えさせることが大切である。

また、様々な作品を読んで、考えたことを記録したり、伝えあったりする学習活動を行うことなどを通して、我が国の伝統的な言語文化の世界に親しむ機会を設定することが必要である。

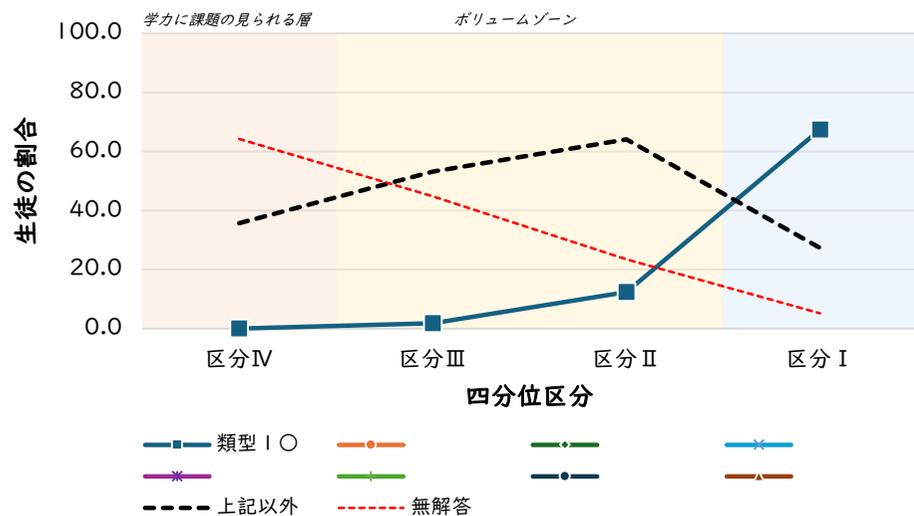
区分ごとの割合 (%)

	区分Ⅳ	区分Ⅲ	区分Ⅱ	区分Ⅰ
類型1	19.7	13.7	14.2	9.0
類型2	18.2	8.9	5.8	2.7
類型3○	22.6	24.2	30.9	62.5
類型4	29.7	43.4	44.7	25.2
上記以外	0.0	0.0	0.0	0.0
無解答	9.9	9.8	4.5	0.6

中学生チャレンジテスト問題分析（1年生・数学）

問題番号	7（2）式	解答形式	短答式	本市正答率	22.9%
問題の概要	「n番目の図形」の面積を n を使った式で表す				
出題の趣旨	具体的な事象において、数量の関係を捉え、文字を用いた式で表すことができる				

G-P分析図（本市1年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、具体的な事象から数量の関係を捉え、文字を用いた式で表すことができるかを問う問題である。正答した生徒の割合をみると、区分Ⅰは67.5%であるのに対し、区分Ⅱでは12.4%、区分Ⅲ・Ⅳではほとんど正答できていない。また、正答以外の解答の割合が多いことから、「できた図形の面積」を具体的に計算するなどして、そこにおいて成り立つ規則性を見出せなかったか、見出せたとしても文字を用いた式で正しく表現することができなかったと考えられる。

特に区分Ⅳの生徒では、無解答率が64.3%と高く、問題解決の見通しをもつことができていないと考えられる。

【指導の改善について】

文字を用いた式で表現する前に、具体的な数値を用いて計算し、数量の関係などについて成り立つ性質を生徒に見出させることが重要である。そしてそれぞれが見出した性質について、根拠をもって説明する活動を通して、求め方の違いを比較・検討し、文字で表現するなど段階的な指導をすることが大切である。

特に区分Ⅳの生徒に対しては、文字を用いて表現する際、文字式の基礎から丁寧な指導をしていく必要がある。

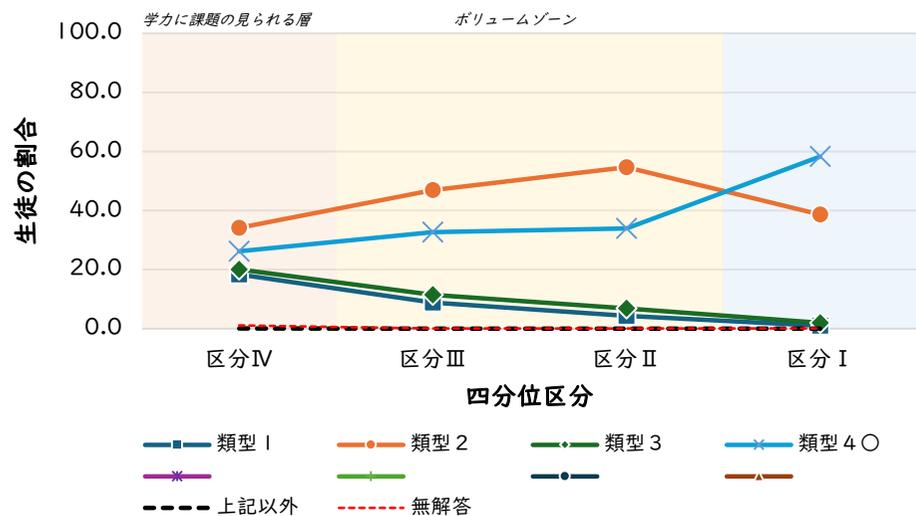
区分ごとの割合 (%)

	区分Ⅳ	区分Ⅲ	区分Ⅱ	区分Ⅰ
類型Ⅰ○	0.0	1.9	12.4	67.5
上記以外	35.7	53.2	64.1	27.3
無解答	64.3	44.9	23.5	5.2

中学生チャレンジテスト問題分析（1年生・英語）

問題番号	5（3）	解答形式	選択式	本市正答率	40.1%
問題の概要	会話文の空欄に入る適切な語句（3人称単数現在の平叙文）を選ぶ				
出題の趣旨	語や文法事項等を理解して、正しい文を書くことができる				

G-P分析図（本市1年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、A: Do you play tennis with her? B: Yes. She () it, and I sometimes play it with her. という会話文の空欄に入る適切な語句（3人称単数現在の平叙文）を選択する問題である。

区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは、正答の類型4（likes）を選んだ生徒の割合が、誤答の類型2（play）を選んだ生徒の割合を下回っており、区分Ⅱでは20%以上下回っている。

このことから、文脈を捉える前に単語の連想から解答を決定した可能性がある。また、「3人称単数現在」の知識はあるものの、主語を確認して動詞を変化させることが十分に定着していないと考えられる。

【指導の改善に向けて】

区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの生徒には、文脈よりも単語の連想を優先する傾向がうかがえる。生徒が、文脈に合った適切な表現を選ぶ習慣を身に付けられるよう、既習の文法事項や語彙を実際のやり取りの中で繰り返し使う言語活動を設定する必要があると考えられる。

区分ごとの割合（%）

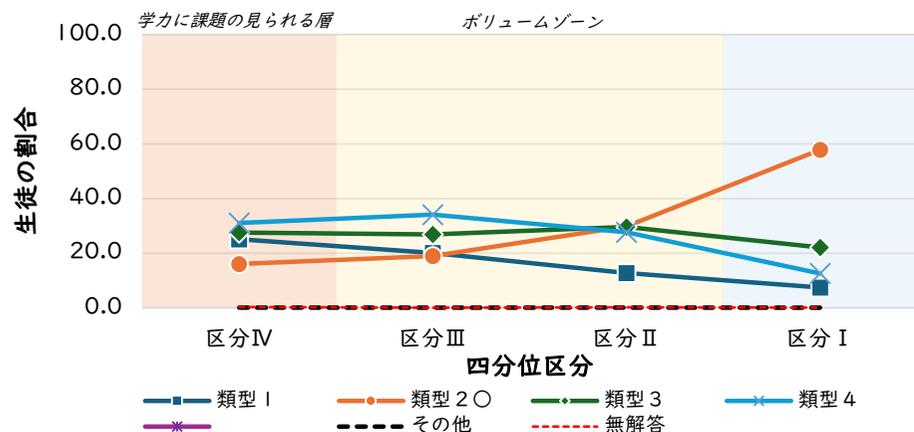
	区分Ⅳ	区分Ⅲ	区分Ⅱ	区分Ⅰ
類型1	18.4	8.9	4.4	1.0
類型2	34.2	46.9	54.7	38.6
類型3	20.1	11.5	6.9	2.0
類型4○	26.2	32.7	34.0	58.3
上記以外	0.1	0.0	0.0	0.0
無解答	1.1	0.1	0.1	0.1

大阪市版チャレンジテストplus問題分析（1年生・社会）

問題番号	1(1)	解答形式	選択	本市正答率	31.6%
問題の概要	世界の姿				
出題の趣旨	面積を正しく表した地図の特徴について理解している。				
正答	②				

類型	正誤	解答類型（定義）
類型1	×	選択肢1を選んだもの（選択問題以外では正答を書いたもの）
類型2	○	選択肢2を選んだもの
類型3	×	選択肢3を選んだもの
類型4	×	選択肢4を選んだもの
その他	×	上記以外の解答
無解答	×	無解答（無記入の場合）

G-P分析図（本市1年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、正積図法の世界地図を見て、その特徴として正しい説明文を選択する問題である。

正答となる類型2のグラフを見ると、正答を選択している生徒は区分Ⅱで29.8%、区分Ⅲ・Ⅳでは20%に満たないことが分かる。

特に区分Ⅲ・Ⅳでは、選択肢のうち正答の類型2を選択した生徒が最も少なく、「面積を正しく表すために高緯度ほど形がゆがむ」という特徴が理解できてないと考えられる。

【指導の改善に向けて】

世界の地域構成を学習するうえで、目的に応じた様々な地図があることを取りあげ、それらの特色に注意して読み取る学習活動を通して、適切な活用方法を身に付けるようにする必要がある。

区分ごとの割合 (%)

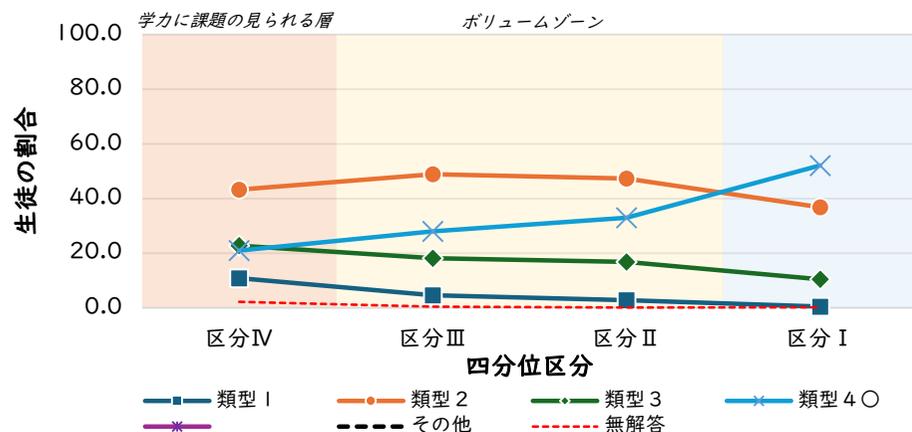
	区分Ⅳ	区分Ⅲ	区分Ⅱ	区分Ⅰ
類型1	25.1	20.1	12.7	7.4
類型2○	16.0	18.9	29.8	57.8
類型3	27.5	26.8	29.6	22.1
類型4	31.1	34.1	27.6	12.6
その他	0.0	0.0	0.0	0.0
無解答	0.3	0.0	0.2	0.0

大阪市版チャレンジテストplus問題分析（1年生・理科）

問題番号	4(3)	解答形式	選択	本市正答率	29.6%
問題の概要	光の性質				
出題の趣旨	キンギョが実際にいた位置を指摘できる。				
正答	④				

類型	正誤	解答類型（定義）
類型1	×	選択肢1を選んだもの（選択問題以外では正答を書いたもの）
類型2	×	選択肢2を選んだもの
類型3	×	選択肢3を選んだもの
類型4	○	選択肢4を選んだもの
その他	×	上記以外の解答
無解答	×	無解答（無記入の場合）

G-P分析図（本市1年生全体）



区分ごとの割合 (%)

	区分Ⅳ	区分Ⅲ	区分Ⅱ	区分Ⅰ
類型1	10.8	4.6	2.8	0.4
類型2	43.3	48.9	47.4	36.8
類型3	22.7	18.1	16.8	10.4
類型4○	20.9	28.0	32.9	52.1
その他	2.2	0.4	0.1	0.2
無解答	0.0	0.0	0.0	0.0

【分析図から読み取ったこと】

本問題は、水槽の上から見えたキンギョの位置から、水中のキンギョが実際はどのあたりにいたのかを作図を基に考え、場所を選択する問題である。

正答は4を選択した類型4であるが、どの区分においても類型2を選んだ生徒の割合が高く、区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは正答である類型4を選んだ生徒の割合を上回っている。しかしながら、類型4（正答）と類型2（誤答）を合わせた割合は、どの区分でも高くなっており、水から空気中へ入射する光の屈折角が大きくなることは一定理解できていると考えられることから、水中にあるものが光の屈折によって浮き上がって見える現象について関連付いていないことが考えられる。

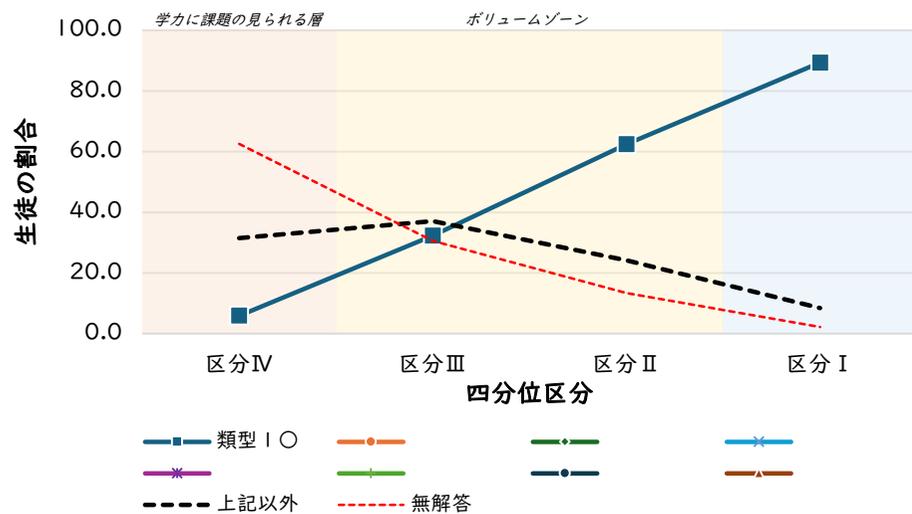
【指導の改善に向けて】

像が見える仕組みと光が境界面で反射・屈折するときの幾何学的な規則性を関連付けて表現させる場面設定が必要である。また、浅く見える池や川、プールでも入ってみると意外に深かったという現象もこの光の屈折によって起こることであり、防災教育の観点からも、教科で学習した内容を日常の場面や生活と関連付けさせるような指導場面を取り入れた授業改善が必要である。

中学生チャレンジテスト問題分析（2年生・国語）

問題番号	四 5	解答形式	記述式	本市正答率	51%
問題の概要	電子メールの下書き中の空欄に事前に確かめておきたいことを書く				
出題の趣旨	伝えたい事柄が相手に効果的に伝わるように書くことができる				

G-P分析図（本市2年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、電子メールの下書き中の空欄に事前に確かめておきたいことを、書き出しの「なお、事前の打ち合わせに関しまして、」に続けて、二十五字以上、六十字以内で書く問題である。区分IIIでは30.6%、区分IVでは62.6%が無解答という結果であり、多くの生徒にとって自分の意見を分かりやすく伝えることが難しいということがうかがえる。

【指導の改善に向けて】

自分の伝えたい事柄を相手に効果的に伝わるように書くために、読み手の立場に立って文書を整える必要がある。そのためにも、普段の授業において、案内や連絡、報告、お礼を伝える文章を書いたり、情報を収集する際に、依頼や質問の手紙や電子メールを送ったりする学習活動を、相手の状況や媒体の特性を考慮して行う必要がある。

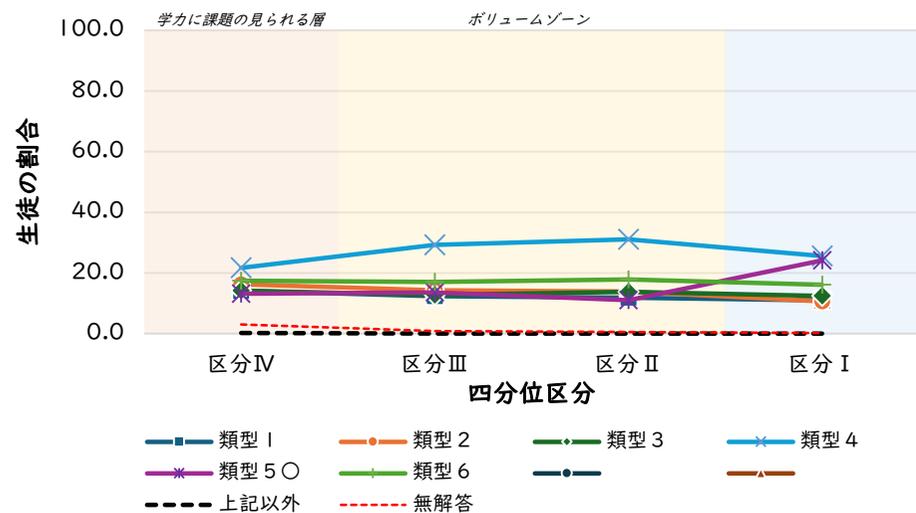
区分ごとの割合（%）

	区分IV	区分III	区分II	区分I
類型I○	5.9	32.3	62.5	89.4
上記以外	31.5	37.1	24.2	8.4
無解答	62.6	30.6	13.3	2.2

中学生チャレンジテスト問題分析（2年生・社会）

問題番号	3（2）②	解答形式	選択式	本市正答率	16.3%
問題の概要	江戸幕府による鎖国に関するできごとについて、起こった順に並べたものを選ぶ				
出題の趣旨	江戸幕府による鎖国に関するできごとの推移を考察することができる				

G-P分析図（本市2年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、江戸幕府の鎖国政策に関するできごとについて、起こった順に並べたものを選択する問題である。

まず、正答となる類型5のグラフを見ると、区分Ⅰで24.1%しか正解しておらず、区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは選択肢6つを無作為に選択する確率より低い正答率になっていることがわかる。

一方で、全ての区分で最も多く選択された誤答の類型4と、誤答のうち2番めに多く選択された類型6は、いずれも島原・天草一揆をポルトガル船の来航禁止より後とする選択肢であり、島原・天草一揆を鎖国政策の結果と捉えていると考えられる。

【指導の改善に向けて】

歴史的事象について、背景、原因、結果、影響など、事象相互の関連を多面的、多角的に考察する活動を取り入れる必要がある。

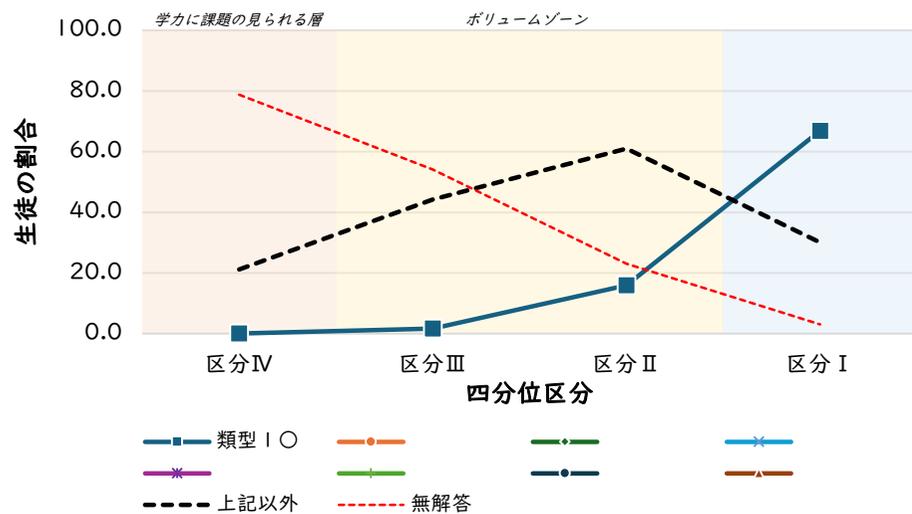
区分ごとの割合（%）

	区分Ⅳ	区分Ⅲ	区分Ⅱ	区分Ⅰ
類型1	14.1	12.3	11.8	11.0
類型2	16.3	14.2	13.9	10.6
類型3	14.2	12.7	13.8	12.4
類型4	21.7	29.3	31.1	25.6
類型5○	13.1	13.6	11.0	24.1
類型6	17.4	17.0	17.9	16.1
上記以外	0.2	0.1	0.0	0.0
無解答	3.0	0.8	0.5	0.2

中学生チャレンジテスト問題分析（2年生・数学）

問題番号	5（2）	解答形式	記述式	本市正答率	24.2%
問題の概要	4つの数 a、b、c、d の和が4の倍数になることの説明を完成させる				
出題の趣旨	事柄が成り立つ理由を文字式を用いて説明することができる				

G-P分析図（本市2年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、変化の規則性を文字を用いた式で一般化し、4の倍数であることを論理的に説明する力を問うものである。区分Iの正答率が66.9%であるのに対し、区分IIでは15.9%と減少し、誤答（上記以外）が61.0%に達している。これは、区分IIの生徒が、式の意味を読み取り、 $4 \times (\text{整数})$ の形へ計算する「形式的な操作」や結論を導くための「典型的な記述の方法」に課題を抱えていることを示唆している。また、区分III・IVでの無解答率の高さは、解決の見通しを立てる段階でつまずいていると考えられる。

【指導の改善に向けて】

指導に当たっては、数量の関係や法則などを具体的な数で計算することから推測し、文字を用いた式で表現することを検討するなどの対話的な機会を設けることが大切である。また、見いだした性質をどのように記述すれば「いつでも成り立つ」と言えるよう一般化できるかについて、対話を通じて検討する活動を充実する必要がある。

区分ごとの割合（%）

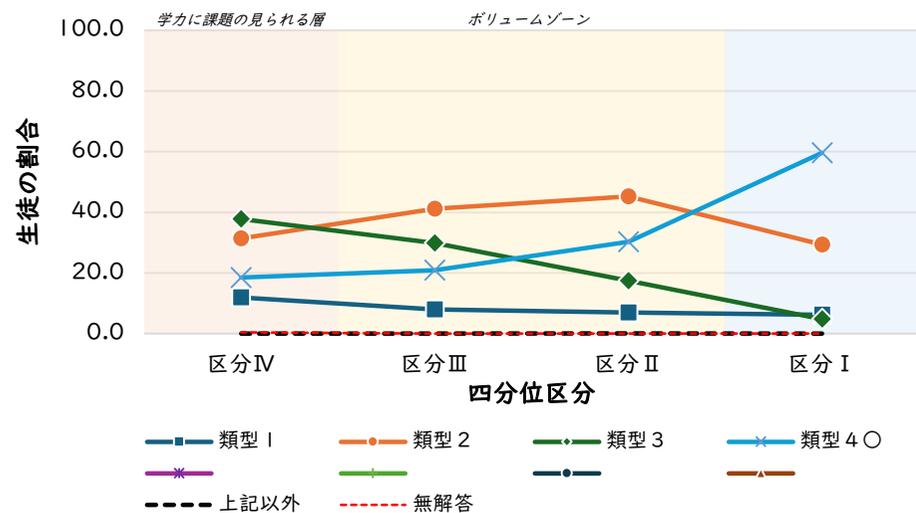
	区分IV	区分III	区分II	区分I
類型I O	0.0	1.7	15.9	66.9
上記以外	21.2	44.2	61.0	30.1
無解答	78.8	54.1	23.1	3.0

中学生チャレンジテスト問題分析（2年生・理科）

問題番号	I (2) ②	解答形式	選択式	本市正答率	34.1%
------	---------	------	-----	-------	-------

問題の概要	血液や血管について正しく述べた文を選ぶ
出題の趣旨	血液や血管について理解している

G-P分析図（本市2年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、ヒトの血液や血管の特徴について正しく述べた文を選択する問題である。

まず、誤答の類型2を選択した生徒の割合は、区分Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは誤答の中で最も高く、区分Ⅳでも31.4%である。これは「静脈と静脈血を正しく理解できていない」と考えられる類型で、血管とそこを流れる血液について関連付けられていないと考えられる。

また、区分Ⅳに向かうにつれて、誤答の類型3の割合が増加している。あわせて正答の類型4の割合が減少していることから、前問において「酸素を運ぶ＝赤血球」の出題がなされていることと関連して、「組織液は酸素を運ばない」と誤って理解していると考えられる。

区分ごとの割合 (%)

	区分Ⅳ	区分Ⅲ	区分Ⅱ	区分Ⅰ
類型1	11.9	7.9	7.0	6.2
類型2	31.4	41.2	45.2	29.4
類型3	37.8	29.9	17.4	4.8
類型4○	18.5	20.9	30.3	59.6
上記以外	0.0	0.0	0.1	0.0
無解答	0.4	0.0	0.0	0.0

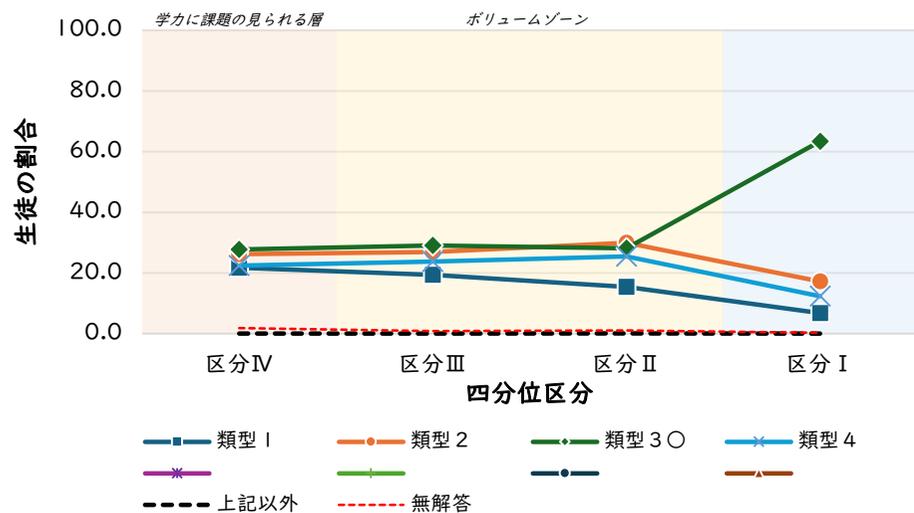
【指導の改善に向けて】

特に区分Ⅳの生徒においては、一つ一つの用語は理解できていても、それらを関連付けて理解することが難しい場面があると思われる。そのため、これからの授業改善の方法としては、血管や血液、組織液、循環といった、血液の循環に関連する内容を体系的に指導する必要があると考えられる。

中学生チャレンジテスト問題分析（2年生・英語）

問題番号	6（3）	解答形式	選択式	本市正答率	37.9%
問題の概要	スピーチ原稿を読み、What did Kenta learn about the menu of Japanese school lunches? という質問に対する答えとして合わないものを選ぶ				
出題の趣旨	日常的な話題についてのスピーチ原稿を読み、話の概要を捉えて、内容の要点を適切に把握することができる				

G-P分析図（本市2年生全体）



【分析図から読み取ったこと】

本問題は、スピーチ原稿を読み、質問に対する答えとして適していない英文を選択する問題である。

区分Ⅰでは、正答の類型3を選んだ割合が60%を超えている。一方、区分Ⅱ～Ⅳでは、いずれも30%程度にとどまり、誤答の類型2および類型4の割合も20～30%となっている。

生徒はスピーチの概要をおおまかに捉えていると考えられるが、「適していないものを選ぶ」という設問の意図に沿って情報を整理することに課題があり、本文のキーワードと選択肢を適切に照合できなかった結果、推測で解答した可能性がある。

【指導の改善に向けて】

まとまりのある文章を読む際には、各段落の役割や中心となる文に着目させ、文章全体の構成を整理しながら読み進めることで、要点を構造的に把握できるよう指導する必要がある。

区分ごとの割合 (%)

	区分Ⅳ	区分Ⅲ	区分Ⅱ	区分Ⅰ
類型1	21.7	19.4	15.4	6.8
類型2	26.2	26.9	30.0	17.2
類型3○	27.8	29.1	28.1	63.4
類型4	22.5	23.7	25.5	12.3
上記以外	0.0	0.0	0.1	0.0
無解答	1.8	0.8	1.0	0.3